

語法の二大別

第二章 語法の部類

語法の研究には二つの大きな別ちがあります。一は分析的^{分析的}の研究で、他は總合的^{總合的}の研究であります。分析的^{分析的}の研究の對象は單語であります、即ち語法の分析的^{分析的}研究に於きましては言語を單語に分析致しまして、これを比較して、意味・形式・職能等の上に於て各の一致及び差異を確定するのであります、單語の性質・任務は之に依つて悉く明瞭となるのであります。けれども此丈の研究では其の語が思想發表上如何に運用されるかと云ふことを知ることが出来ない、そこで總合的^{總合的}研究の必要が生じて來るのであります。即ち語法の總合的^{總合的}研究に於きましては、分析的^{分析的}に研究した語を基礎と致しまして、それが相依り相俟つ所の狀態を研究致します。言を換へて申しますれば、思想發表上に生ずる語の相互の關係を研究致します。言語を分析的^{分析的}に研究する部門を品詞論^{品詞論}と名づけ、總合的に研究する部門を文章論^{文章論}と名づけます。文典に依りましては此の外に音韻論と云ふ部門を設けますが、これは言語學の補助學科として別箇に論ずべきもので、語法の部別の中には

入れない方が却つて宜しからうと思ひます。

却説品詞論の對象と致しまする所の單語は之を大別致しまして、言と辭との二つにいたします。言と云ふのは單一なる觀念を表すものを云ひ、辭とは夫自身では何等の觀念をも表すことが出來ずして、言に附いて種々の事情を表し、又は他の語との關係を表すものを云ひます。即ち言は西洋文典に所謂實語、辭は虚語であるのであります。例へば

笑はんと欲せば一家の和合を計るべし。

と云ふ文章に於きまして、をを施したのは言、をを施したのは辭でありまして、此等が結合して全體の文を構成して居るのであります。大槻博士の廣日本文典には此の文の「と」「ば」「の」「を」の如きものを辭といつて、「ん」「べし」の如きものは辭とは云はれませんが、これは私の申す辭よりは範圍が狭い。私の申す辭は觀念を表さぬ形式的の單語の總べてを含めて居るのであります。

かくの如く單語は先づ之を分つて言と辭との二つに致しますが、更に言を分つて體言、用言及び準體言の三つとし、辭を分つて助動詞、助詞の二つに

致します。

一、體言と申しますのは、實體又は實體として取扱ふことの出来るものを表す語で、之に、(1) 其の名稱を云ふものと、(2) 其の名稱の代に用ゐられるものと、(3) 其の數量又は順序を云ふものとの三通あります。(1) は名詞、(2) は代名詞、(3) は數詞でありますして、何れも語尾を變化致しませぬ。

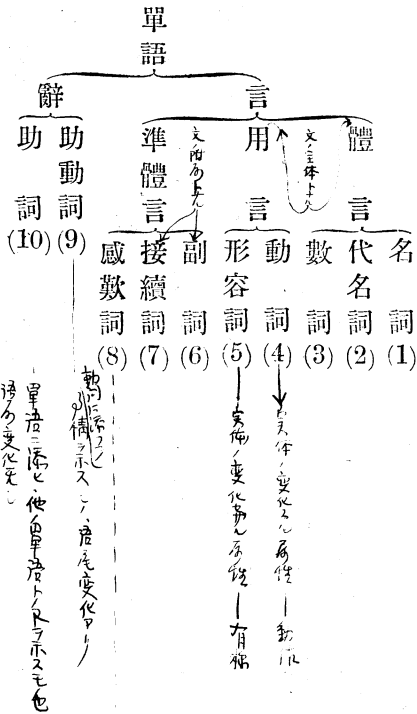
二、用言と申しますのは、實體の屬性を表す語で、之に、(1) 變化する屬性即ち動作を表すものと、(2) 變化しない屬性即ち有様を表すものと二通りあります。(1) は動詞、(2) は形容詞であります。

三、準體言と申しますのは、體言以外の語尾を變化しない語を云ふので、之に(1) 他の語を限定するものと、(2) 語句を接續するものと、(3) 感動を表すものと三通りあります。(1) は副詞、(2) は接續詞、(3) は感動詞であります。

體言と用言とは文の主體となるべきもので、準體言中の副詞と接續詞とは其の附屬となるべきもの、感動詞は言の獨立したものであります。

四、助動詞と云ふのは主として動詞に添つて種々の事情を表す辭で、語尾を變化いたします。

助動詞及び助詞は體言・用言に並んで語法上緊要な位置を占むべきものでありまして、之を一つ誤用するが爲に忽ち全文の趣を損ひ、一つ誤解するが爲に忽ち全文の意を失ふことも往々あるのであります。即ち昔此の方面の研究が先づ起つたのも無理ならぬことであるのであります。以上申し上げた所を表に示しますと、



育が独立してゐる也

品詞の轉換

となります。此の表の最後の分類即ち(1)(2)(3)(4)(5)(6)(7)(8)(9)(10)を品詞と云ひます。

處で斯の如く分類致しました所の品詞は、或る品類と他の品類との間にいつも劃然たる境界線があるのであるものではありまして、用ゐる様に依りましては、甲の品類に屬するものが乙の品類に轉じ、乙の品類に屬する語が甲の品類に轉じることがあります。例へば「料理」綱は名詞でありますが、「れうる」「つなぐ」のやうに用ゐられて動詞となり、「遮る」霞むは動詞でありますが「霧」「霞」のやうに用ゐられて名詞になります。斯の如く品詞から他の品詞に轉じますのを品詞の轉換と云ひます。

熟語・由生語
(接頭語・接尾語)

單語は又同じ品詞のもの同士又は他の品詞のものと結合して更に一つの單語を作ることがあります。例へば「山」と云ふ名詞は他の「道」と云ふ名詞と合して「山道」と云ふ單語を作り、「崩る」と云ふ動詞と合して「山崩れ」と云ふ單語を作ります。又「突く」と云ふ動詞は他の「倒す」と云ふ動詞と結合して「突倒す」と云ふ單語を作り、「爪」と云ふ名詞と合して「つまづく」と云ふ動詞を作ります。斯の如くにして出來た單語を熟語と申します。單語は又或語素と合

して更に一つの單語を作る事があります。例へば「春」と云ふ名詞は「初」と云ふ語素が附いて「初春」と云ふ動詞を作り「めく」と云ふ語素が附いて「春めく」と云ふ動詞を作ります。「亂る」と云ふ動詞は「かき」と云ふ語素が附いて「掻亂る」と云ふ他の動詞を作り「がまし」と云ふ語素が附いて「みだれがまし」と云ふ形容詞を作ります。斯の如くにして出來た單語を由生語と云ひます。由生語の上部につく語素は之を接頭語と云ひ下部に付く語素は之を接尾語と云ひます。

却說これで大體品詞論の準備は致しましたが、尙一つ附け加へて置きたいと思ひますことは敬語法のことであります。西洋では我が國と國情が違つて居る爲でもありませうが、殆んど敬語と云ふものを認めません。處が我が國では既に神代の時からして職業を世襲すると云ふ風が引續きました爲でもありませうが、自分や階級と云ふことが深く人心に浸み込みまして、上下の區別即ち禮節と云ふことが總べての事に附隨して、自然言葉の上にもあらはれて來ました。即ち目上に關する物事や動作は特別に尊敬した語を使ひ、又之に對する自分の物事や動作は特別に卑下した語を使ふ。

例へば「言ふ」と云ふ動作を云ひ表すにも、高貴の人の動作であつたならば「仰す」「仰せらる」「仰せたまふ」のたまふなどと文語では云ひ、おつしやる「おつしやいます」などと口語では云ひ、自分の動作であつたならば「申しさふらふ」「さこゆ」などと文語ではいい、申す「申します」などと口語では云ふのであります。斯の如く同じ物事や動作に差等をつけて言ひ表すことは、上古の文學に於て既に其の事實を認めることが出来るのであります。が、中古に至つて漸く多い。チエンバレン氏は源氏物語の中から敬語謙語を省いたならば、其の容量は半分になるだらうと申して居りますが、其の位目立つて多いのであります。これが近古を経て近世になりますと云ふと、主従の關係が益々複雑になると共に愈々甚だしくなつたのであります。處て明治の御代になりますと東西の風俗文物が混淆した爲でもあります。か、一般の禮節が廢れると共に敬語謙語が文語に於て著しく減りました。尤も口語に於きましては左程には感じませぬけれども、尙地方に依つては甚だしく亂れて、皇室の御事を申上げるにさへ、随分ぞんざいな言葉を用ゐるものがある。注意を要する事柄であると思ひます。尤も徳川時代のやうに繁褥に過ぎるのも

文章論

文又は文章
(主語・述語)

如何でありますが、もう少し整理をする必要があると存じます。殊に對手の上下に依つて、差等ある語を用ゐると云ふのは、日本語の特長でありますから、其の日本語の法則を記す語法書に於きましては、必ず之に關する事柄を説かなければならぬ、然るに今日の普通の文典が殆んど之を説いて居りませぬのは、甚だ不備であると存じます。さすがにアストンやチエンバレンの日本文典の中には、不十分ながらも之を説いて居るやうであります。私も名詞代名詞・動詞・助動詞等、敬語・謙語に關する品詞に於きましては必ず之を附説しようと思ふのであります。

夫から次は品詞論に對する文章論でありますが、之には豫め分類して置かなければならぬ様な事柄も御座いませぬ。尤も品詞論に屬する事柄を説明するときに、時々文章論に屬する事柄をお引合に出すこともありすから、茲では其の大體の用意を致して置くに止めようと思ひます。それは文又は文章節及び連語と云ふ術語の意味であります。

文又は文章と申しますのは、言辭が結合、致しまして、一つの纏つた思想を表すものを云ひます。例へば「月出づ」「山が高い」と云ふのは、何れも言辭が結

合して完全なる思想を表して居りますから、文又は文章であります。文又は文章には此の例の「月」「山」のやうに敘述の主題になるものと、「出づ」「高い」のやうに主題に就いて敘述するものを要します。前のを主語といひ、後のを述語と云ひます。

文は獨立してあらはれず、或大きな文の一部分としてあらはれることがあります。例へば「夜」の更くるをいふ「駒が勇むば花が散る」「夜」の更くる「駒が勇む」の如きもので、何れも主語述語を具へて文を成して居りますが、而も全文の一部になつて居る。個様なのを節と云ひます。

次に言辭が結合しまして、單語が表すよりも複雑な觀念を表しますけれども、いまだ纏つた思想を表すに至りませんときには、之を連語と云ひます。例へば「美しき鳥」「梅の枝に」「面白く鳴く」の類であります。

文又は文章節連語の説明もこれで終へました。之から愈々各論にはいることに致します。